



建築歴史文化研究室
Architectural History and Culture Lab.

妻木 宣嗣

TSUMAKI, Noritsugu / Associate Professor

蔀戸の研究

The study of Shitomido

序論

近代の建築、特に住まいなどでは主に開き戸や引き戸、折れ戸といった建具を見栄えや使い勝手などによって使い分けている。しかし平安時代、貴族たちが暮らしていた寝殿造に目を向けると、開口部に蔀戸と呼ばれる建具が多く用いられている。近代建築ではあまり姿を見せることはなくなった蔀戸であるが、意匠的な効果が非常に高く、興味深い柱間装置である。

本研究では、蔀戸に関する基本的な歴史や構造などを理解し、他の建具と比べ、どのような効果があるのかについて考察する。また『絵巻で読む源氏物語 毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」』¹⁾に掲載されている「源氏物語絵巻」を用いて、蔀戸が最も華やかな時代であった平安時代にどのように使われていたのか考察する。

寝殿造と蔀戸

寝殿造とは、平安時代に完成され全盛期を迎えた寝殿や対屋を中心とした建築様式である。この寝殿造は当時の貴族の生活様式などの観点から「自然との調

和」や「開放的な建築様式」を重視していた。これらを最も表していたのは「蔀戸」である。蔀戸とは表裏両面に格子を組み、その間に板を挟み込んだ戸であり、その最大の特徴はその構造にある。蔀戸の大半は半蔀と呼ばれる一枚の蔀戸を上下で半分に分かれたものである。上半分の上蔀を垂木もしくは庇に取り付けられた金具に吊り上げ、下半分の下蔀は柱に直接取り付け、自由に取り外しが可能になっている。これにより蔀戸は開放された時、内部と外部の仕切りを完全に消すことができる。このように「自然との調和」また「開放的な建築様式」をテーマとする寝殿造にとって蔀戸は最も適した建具であったといえる。

蔀戸の意匠的效果

他の建具と比較して蔀戸はどれほどの効果があるのかをArchicadを用いて、実際に検証した。結果として、蔀戸は内部から外部を見るとき他の建具と比べ、圧倒的に視界を妨げることがないということが分かった。これにより蔀戸は、外部から内部に入ってくる光や音、風

などは何にも妨げることがなく、内部と外部が一体とするような効果があることが分かった。

蔀戸の様々な姿

蔀戸はその構造上、大きく分けて三つの姿がある。一つ目は、下蔀が柱間から外され、上蔀は垂木に取り付けられている金具に吊り上げられている状態、二つ目は、下蔀は柱間に取り付けられたままで上蔀のみ金具で吊り上げられた状態、三つ目は、下蔀が柱間に取り付けられ、上蔀が閉じられている状態である。「源氏物語絵巻」を見るとそれぞれの姿が様々な場面でそれぞれ活用されていることが分かった。また「源氏物語絵巻」を見ると「御簾」が下げられている場面が多くあった。これは開放的な建築様式を持つ寝殿造の弱点であるプライバシーの確保を蔀戸より簡単にとることができ、御簾を介してやりとりを行うことで絶妙な距離感を作ることが分かった。

参考文献

- 1) 龍澤 彩「絵巻で読む源氏物語 毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」三弥井書店、2017



垣脇 尚平

KAKIWAKI, Shohei



日本における酪農の現状と課題 次世代の酪農建築

Current situations of dairy farming in Japan and its challenges for the future: Architecture for next generation dairy farming

序論

現在、世界ではエネルギー問題や環境問題、貧困などの様々な問題が蔓延している。その中でも食糧問題は最も人類の存続に関わる重大な問題であると考へた。現在日本ではあまり食糧問題についてテレビなどでは取り上げられる事がなく、危機感を感じられない。現状を知る人も限られている。日本の現状を更を知るべく一次産業の中で酪農という産業に着眼。北海道の牧場で修行を行い、そこで根本的な問題点を見つけ、日本を更に豊かにするために次世代の酪農のあり方を考へる。

牧場での生活

午前3時に起床し3時半~7時の間と15時半~19時半の間に搾乳を行い22時に就寝。朝の搾乳後には子牛の授乳、餌押し、母牛の体調管理、餌押しなどを行う。午後は人工授精、獣医による検診、機械のメンテナンスなどを行う。牧場での生活は生き物を生業とするため、牛基準の生活サイクルとなる。

酪農業界の現状

現在日本の酪農業界では深刻な後継者不足であり、人手不足による労働時間と作業量の増加が大きな課題とされている。また、世界的には酪農のIT化や自動化が進んでいる中で、日本の酪農家のほとんどが家族経営の個人事業であるために高価な全自動搾乳機などを導入することが出来ず、利益をあまり出すことが出来ない。コミュニティが小さいことから



うつ病などを発症する人が多いことも問題視されている。

次世代の酪農

酪農というコンテンツを拡大するためにも体験型牧場でありながら、全自動搾乳機の前面導入。牧場の法人化。乳製品の製造販売や、アミューズメントパークとしての運用などを行うことで事業拡大する必要があると考へた。事業拡大することによって収益の安定化とコミュニティの拡張を計らう。コンテンツが拡張することによって酪農への知識や情報にアクセスしやすくなり、職業に酪農家という選択肢を付与する。

結論

現在の日本は1次産業に対する関心が低く、酪農だけでは無く1次産業全般で後継者不足が問題とされている。コンテンツを増やすことによって少しでも興味、関心を抱く若者を増やしていくことが、これからの日本を豊かにしていくことで最も重要である。



審査会賞
(論文部門 第1位)

梶本 仁

KAJIMOTO, Gene

